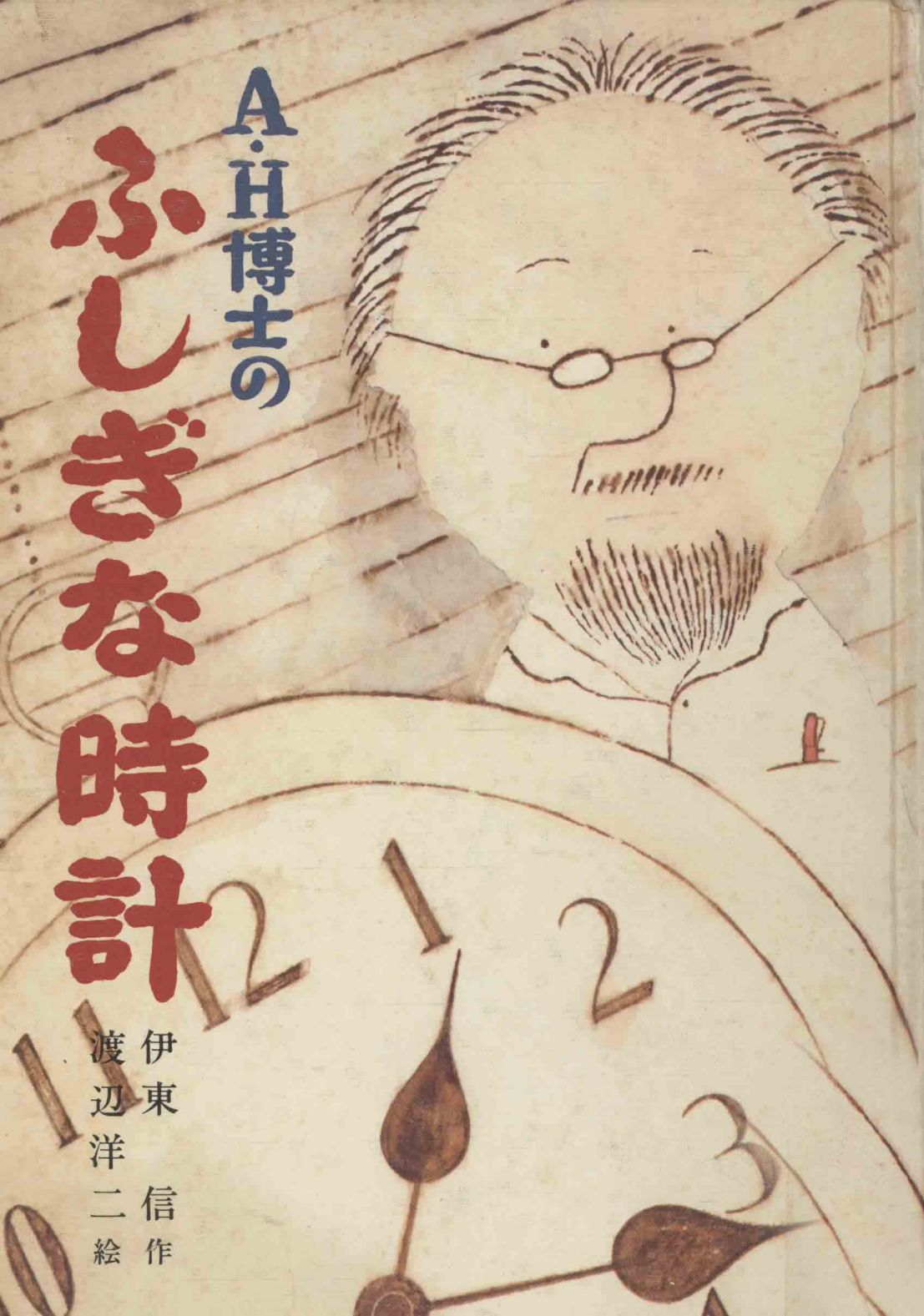


A.H博士の

ふしぎな時計

伊東 信作
渡辺 洋二 絵





こども文学館 15

定価 780円

A・H博士のふしぎな時計

1980年6月 第1刷

著 者 伊 東 信 (いとう しん)

画 家 渡 辺 洋 二 (わたなべようじ)

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポ プ ラ 社

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替東京 4 - 149271

印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

NDC 913/158p/22cm 8093-095015-7764

printed in Japan

©伊東 信 渡辺洋二 1980

A・H博士のふしぎな時計

伊東 信・作 渡辺洋二・絵

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

まえがき

この世に魔法^{まほう}使いはいなくとも
魔法のおこることもある。

それは、人間てやつが

魔法使いよりもすばらしい
力をもっているからなんだ。

A・H博士のふしぎな時計

十 も く じ

ホッペルマイヤー博士の大発明

7

病室にとじこめられた少年

17

船乗り大助の漂流

26

びっくり堂のタマばあさん

53

少女と画家と白鳥

85

スリの名人、八太の大失敗

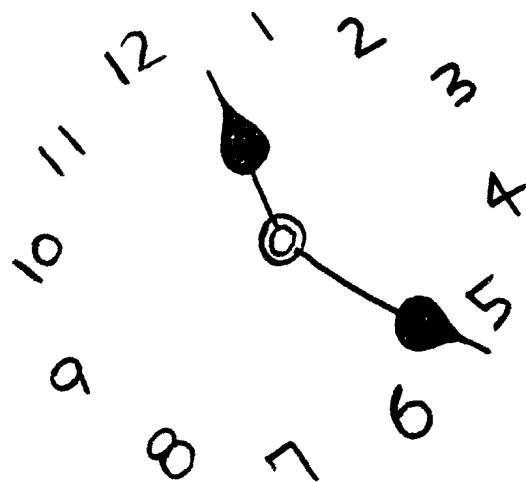
124

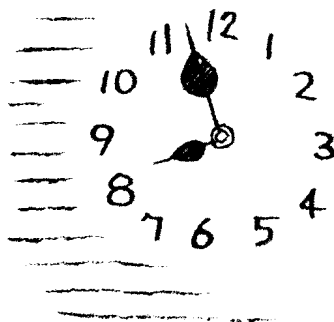
少年は虹をわたった

147

あとがき

157





▶作者・伊東 信（いとう しん）

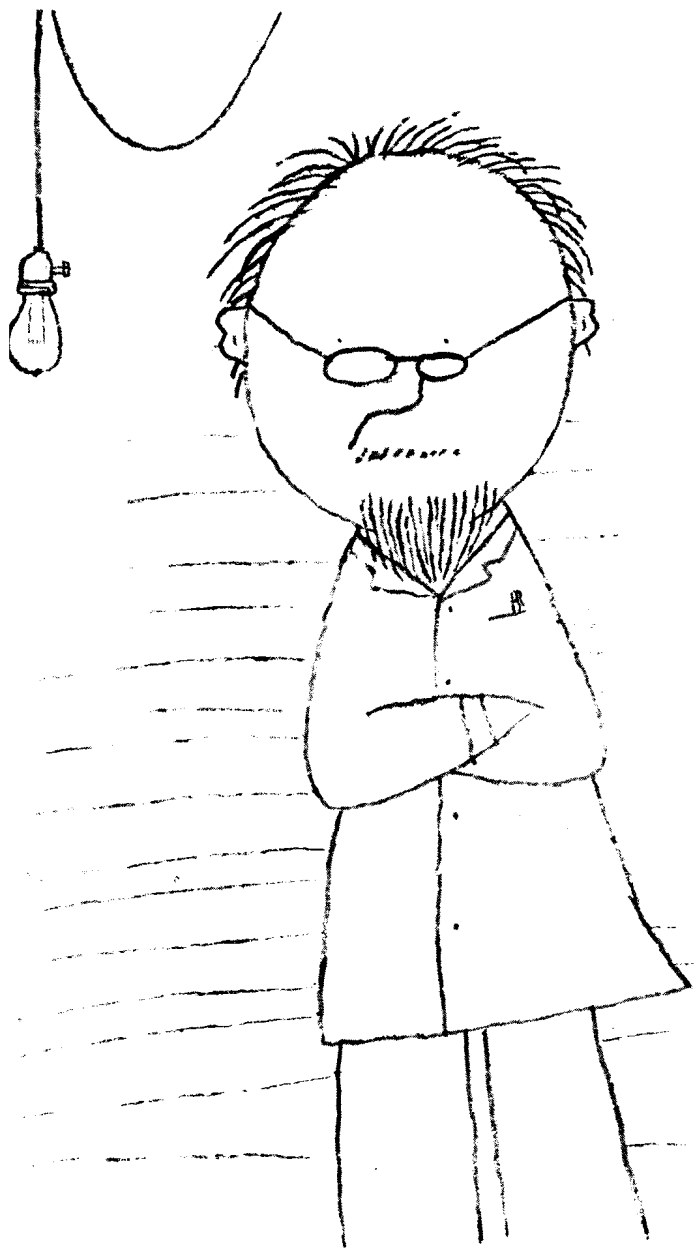
1928 年、山形県酒田市に生まれる。中央大学文学部卒業。著書には一般文学の作品が多く「地獄鉤」「航跡はいまだ」「ガダルカナルの夜光虫」など多数。児童文学では、「アフリカはまだか」「SOS地底より」（'80 年度課題図書・いずれもポプラ社）「A・H博士のふしぎな時計」は三作目である。

現住所 埼玉県上福岡市上野台 143-5

▶画家・渡辺洋二（わたなべ ようじ）

1943 年、東京に生まれる。武蔵野美術大学油絵科卒業。絵本・さし絵の分野で幅広く活動し、独特な抒情の世界を築く。絵本に「こぶたのプープ」「こねこのルナ」（いずれもポプラ社）幼年童話に「まほうのハンカチ」（ポプラ社）「ふとんかいすいよく」（あかね書房）など多数ある。

ホツペルマイヤー博士^{はかせ}の大発明



みなさんはスイスという国が、すぐれた時計の生産国だということは知ってますね。

そのスイスの科学者で、ノーベル物理学賞をもらったこともある、アルス・ホッペルマイヤー博士のことは知っていますか。

博士がノーベル賞をもらうよりもずっと前に（たぶん十四、五年前）、博士は時間のながれをとめる時計を発明しているんです。でも、どうしたわけか、この大発明は世の中にはあまり知られていません。

時間のながれをとめる時計といっても、スポーツ選手の記録をはかったりする、あのストップ・ウォッチのことではない。刻のあゆみをとめる時計なんです。

もうすこし説明しましょう。

ホッペルマイヤー氏は〈時間〉というものについて、長いあいだ研究していました。

〈時間〉とは、いったいなんだろう。

私たち人間にとって、時間というやっかいなものもしなかったら、人間の生活はもとのんびりと、平和に、たのしくすごすことができるのではないだろうか。

おとなも子どもも、男も女も、まい日まい日時間にはばられ、時間においたてられ、時

間のドレイになっている。

学校へかよう子どもならだれでも一枚まいいじよう以上はもっている、あの時間割表じかんわりひようという、この世でもっともにくたらしいカード。あのカードの中でいちばん自由にならないのは〈時間〉である。

時間というものを、もしも自由にできたら、そのながれを自由にとめることができたら、人類じんるいはこの地球上に戦争をなくすことだってできるだろう（戦争のための時間がとまれば、戦争そのものがとまる。つまり、戦争なんかやってるひまがない、という理屈りくつになる）。

ホッペルマイヤー氏しの研究はつづきます。

では、この〈時間〉をつくりだしているのはなんだろう。

どうもそれは時計らしい。時計こそは時間という怪物かいぶつの生みうの親おやである!!

さすがに時計の国スイスの科学者らしい、これはすぐれた目のつけどころでした。ホッペルマイヤー氏のこの考えが、まちがいでないことは、たとえば「時計がない動物の生活には、時刻じこくなんてものもない」ということから、ぎやくに証明しょうめいできたのです。

たとえば、ねこがねずみをとるのにニャン分かんかかったとか、うしは夜になると、モウそ

ろそろねる時刻だなんて、はかたり考えたりはけっしてしません。キッツキが森の木をコツコツ、コツコツたたいても、あれは時計の秒をきざむ音ではないし、フクロウやハトたちは、人間がかつてにフクロウ時計やハト時計をつくったことにふんがいていいるのです。さて〈時間〉の生みの親は時計なのだとわかれれば、〈時間〉を自由にあやつることもそれほどむずかしくはなさそうです。防音装置をとりつけた壁がうるさい音をすいとるように、ながれ去ろうとする時間をとめる装置の時計をつくれればよいわけです。

研究室にとじこもったホッペルマイヤー氏は、この研究に、それこそ時間のたつのもわすれてとりくみました。一本のねじ、一この歯車、電子ひげぜんまいのばねの設計にもコンピュータをつかい、実験と失敗をくりかえしながら何年かすぎました。

こうして、博士はついに時間のながれをとめる時計を完成したのです。それは、スイスの山やまの雪がとけはじめた春の日でした。

「やったぞ。できた！ できた！」

研究室からとびだしてきた博士は、まちうけていた科学者や報道関係の人びとに、一この時計をかざしてみせました。



試作^{しさく}第一号はやや大型^{おおがた}の懐中時計^{かいちゆうどけい}で、銀製^{ぎんせい}のケースにはいっていました。

まちうけた人びとは口ぐちに、博士^{はかせ}にいいわいのことばをあげました。ホッペルマイヤー氏^しの友だちの科学者がいいました。

「おめでとう、アルス。それにしても、きみが研究室にとじこめたのは五年前の春だった。五年間もよくぞがんばったものだ」

すると、ホッペルマイヤー氏はびっくりしたようすで、その友人にたずねました。

「きみ。いま、なんていった？」

「五年間もよくぞがんばったな、といったのさ」

つめかけていた新聞記者^{しんぶんきしや}が博士に、さっそく問題の時計の実験^{じっけん}をしてみせってくれたのみました。

ホッペルマイヤー氏はみんなの顔を、あなにあくほどもみつめていました。それからじっくりわらっていいました。

「諸君^{しよくん}。この時計のテストは、もう必要がなさそうだ。——いいですか、ぼくが研究室でくらしした時間は二年五か月と十六日間です。ぼくはまい日、日誌^{にっし}をきちんとつける習慣^{しゅうかん}な

ので、これはまちがいない。ところが、きみたちはこのあいだに五年の月日をすごしていたという。もしきみたちがうそをついているのでなければ、この時計は多くの研究の時間を、二年七か月も、とめていたことになる。これでテストはじゅうぶんでしょう」「おおっ」というどよめきと歓声^{かんせい}が、わが博士^{はかせ}のまわりにおこりました。

ちょうどそのころ、イタリアのローマに世界の国々から科学者や文学者や哲学者^{てつがくしや}たちがあつまり、地球の平和と人類^{じんるい}の未来^{みらい}について、かたりあう会議がひらかれていました。ホッペルマイヤー博士はこの会議で「現代人^{げんだいじん}の生活と時間の関係^{かんけい}」について、講演^{こうえん}をすることになっていました。もちろん博士は、新発明のふしぎな時計をもっていき、この会議で発表する考えだったのです。

博士は飛行機でスイスからローマへいきました。ローマの空港^{くうこう}から会議がひらかれている場所までは、タクシーでいくことにしました。

空港の前のタクシー乗り場へむかいながら、ホッペルマイヤー氏^しはくつがよごれているのに気づきました。みだしなみのいい氏は、タクシー乗り場の近くにいたくつみがきの少

年に、くつをみがいでもらうことにしました。

「いそいでやってくれたまえ。これからだいじな会議にいくんだから」

ホッペルマイヤー氏はチョッキのポケットから懐中時計かいちゆうどけいをだしてみ、ちょっと時間をしらべました。



くつみがきの少年は三人もやってきて、左右の足にひとりずつつき、もうひとりはどうして、三人がかりでホッペルマイヤー氏にとりつきました。

きれいになったくつに、ホッペルマイヤー氏はいいい気分。それに、世界じゅうの人びとをアツといわせる大発明の発表を、これからやろうというのです。

ホッペルマイヤー氏は少年たちに気前よくお金をはらい、タクシーに乗って出かけました。

会議場についた氏は入口で、時刻をみようとチョッキのポケットに手をいれました。ところが――

「しまった！」

ない。銀のくさりでチョッキのぼたん穴にとめてあった懷中時計が、くさりもいっしょになくなっていたのです。

やられた！

そのときになって氏は思いあたりました。あのとき、うしろにまわってくつをみがいていた少年が、へんにからだをおしつけ、おぶさるようにしていたことを。